

昔むかし、ひとりの船乗りがいました。名前をペレといました。ペレは、とても腕のよいコックでした。船長からも頼りにされていたし、仲間からもたいそう好かれていました。

あるとき、スペインの海を航海しているとき、ペレの親友だった水夫が、船端から落ちて深い海に姿を消してしまいました。ペレは、深く悲しみました。

それから五、六年たって、またスペインの海を航海していたとき、あの水夫が落ちたちようど同じ場所にやって来ました。ペレは、船長に、これまでの給料と船を降りる許可を欲しいといました。

船長は、

「こんな荒海の真ん中で、給料をもらってどうするんだ。それに、どうやって船を降りるんだ」といいました。ペレは、

「どうしても降りたいのです。船倉のふたを一枚ください。それに乗って行きます」とたのみました。

ペレは、お金をふくろに入れて、船倉のふたに乗って、船を離れました。

いくらか行かないうちに、海の中からひとりの男が出て来て、黙ってペレのとなりに座りました。それは、あの水夫でした。水夫は、

「おまえには、世話になったなあ。友情に感謝しているよ。だから、おれも、おまえに親切を尽くそうと思う。世の中のあらゆる幸運を授けよう」といいました。

そのとき、一頭のひげクジラがやって来て、ひれを船倉のふたのひもにひっかけ、ふたを乗せたまま、ものすごい速さで、波を切って引っ張っていきました。

やがてふたりは、無人島に着きました。ペレがふり返ると、友だちの水夫は死体になっていました。そこで、海岸に穴を掘ってお墓を作り、水夫を丁寧に葬りました。それから、幸運を求めて、島の奥へと、どんどん歩いて行きました。

まもなく、小さな洞窟を見つけました。洞窟は、地下深く続いていました。入っていないと、やがて、はなやかな広間に着きました。そこに、ひとりの乙女がいました。乙女は、いいました。

「まあ、不幸せな人、どうしてこんな所に来たのです。ここは、十二人の盗賊のすみかです。わたしは、ある国の王女ですが、盗賊たちにさらわれてきたのです。あの人たちは、まもなく帰って来るでしょう。あなたは、自分も盗賊だと見せかけなさい。そうではないと命をとられてしまいます」

そこへ、十二人の盗賊たちが帰ってきました。盗賊たちは、ペレに、

「おまえは何者だ」とたずねました。

「あんたたちと同じ盗賊さ」

「そうか。だが、盗みのほかに、何か手仕事はできるか」

「おれは、コックだ」

こうして、ペレは、盗賊たちが出かけているあいだ、洞窟に残って食事のしたくをするようになりました。

やがて、ペレと王女は結婚の約束を交わしました。王女は、自分と父親の名前が彫つてある指輪を半分に割り、ハンカチも半分にさいて、ペレにあたえました。

あるとき、盗賊たちが盗みから帰つて来ると、ペレは上等の強いお酒を盗賊たちに出しました。盗賊たちは、飲み飲み、すっかり酔っぱらってしまいました。ペレは、熱いスープのなべを運んできて、よろめいたふりをして、中身を盗賊たちの顔にかけました。それから、みんなをなぐり殺してしまいました。

ペレと王女は、洞窟から宝物を運び出して、ボートに積みこみました。長い航海の末に、ボートは王女の国に着きました。ふたりは、宝物を四台の車に積んで城に向かいました。

途中、宿屋に泊まったとき、ペレは、よせばいいのに、自分たちの冒険を周りのお客たちに物語りました。それを、ふたりのならず者がすっかり聞いてしまいました。ならず者たちは、城への道で待ち伏せしてペレたちをおそい、ペレをなぐりたおしてしまいました。そして、王女をおどして、王女を救つたのは自分たちだというように、むりやり約束させました。

王女とならず者たちが城に着くと、王さまは大喜びして、城の人たちからも大歓迎を受けました。

王女は、ふたりのならず者のうち、ひとりを選んで結婚することになりました。ただし、王さまが重い病気なので、もとのように元気になるまでは、王女の結婚もおあずけということでした。

いつぼう、ペレをは、お医者の方に運ばれて、手あつい看病のおかげで、すっかり元気になりました。

ある日、お医者さんが、ペレにさじを一本わたして、いいました。

「おまえは、何とか工夫をして、城の台所に勤めるんだ。そして、このさじで王さまのスープをかき回しながら『これが元気をもたらし、王の健康に役立つように』と唱えるんだ。そうすれば王さまは元気になり、おまえと王女は幸せになるだろう」

それから、お医者さんは、

「おまえのためにもうこれ以上のことはできない。長いあいだ仲良くしてくれてありがとう。元気だな」といって、消えました。お医者さんは、あの死んだ水夫だったのです。

ペレは、城に出かけて行って、コックの見習いとしてやつてもらいました。王女はペレに気づいて、たいそう喜びました。

ある日、コック長が、王さまの病気を治すスープを出すようにと命じられました。もしそれで病気が治らなければ、コック長の命はないということでした。コック長は、とほうに暮れました。すると、見習いコックのペレがいました。

「ちつとも難しいことじゃありませんよ。ぼくにまかせてくれますか」

コック長は、たいそう不安でしたが、とにかく任せることにしました。

ペレは、台所でひとりになると、大きな鍋に水を入れて火にかけました。そして、友だちの死んだ水夫からもらったさじをとり出して、なべの中をかき回しながら唱えました。

「これが元氣をもたらし、王の健康に役立つように」

それから、コック長に、このスープを王さまの所に運ぶようにといいました。

王さまは、スープのにおいをかいただけで、もう生き返ったような気がしました。そして、ひとさじ飲むとにつこり笑い、二さじ飲むとベッドの上に起き上がり、三さじ飲むと立ち上がりました。とうとうぜんぶ飲んでしまうと、王さまはすっかり元氣になって、部屋じゅうを歩きまわりました。王さまは、コック長に、

「このスープは、おまえが作ったのか」とたずねました。

「いえ、これは、見習いコックのペレが作ったものでございます」と、コック長が答えると、王さまは、ペレにほうびを与え、給仕長に任命しました。ペレは、食事のときはいつも王さまのいすの後ろに立って、王さまの杯にお酒をつぎました。

さて、王さまが元氣になったので、王女は、あのならず者のどちらかを夫に選ばなくてはなりませんでした。

お姫さまが夫を選ぶ日になると、盛大な宴会が開かれました。ペレは、王さまにお酒を注ぐとき、王女からもらった半分の指輪を、王さまの杯の中にそつと落としておきました。王さまが杯を飲み干すと、杯の底でチャリンと音がしました。王さまは指輪を見つけて、そこに自分と王女の名前が半分あるのを見ました。そこで、王女に、

「残りの半分はどこにあるのか」とたずねました。王女は、もう黙っていませんでした。

コックのペレに無人島から救い出されたこと、目の前のテーブルに着いているふたりのならず者に、命はないぞといって、無理にうそをいわされたことを話しました。王女がハンカチの半분을さし出すと、ペレが残りの半分を出しました。王さまは、さつと立ち上がりました。ならず者たちは、すぐさま牢屋に投げこまれて処刑されました。

王さまは、コックのペレと王女を結婚させました。ペレは、王さまが亡くなると、その国をつぎました。そして、末永く幸せに尊敬されて暮らしました。

村上郁再話

資料『世界の民話3 北欧』櫛田照男訳／ぎょうせい